



群馬県コンクール 金賞

お米の価格高騰を通して

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校 2年 小暮 統和

最近、ニュースで頻繁に耳にする「お米の価格高騰。」いつも朝晩あたり前のように食べていたお米が、少し遠い存在になったように感じた。そのせいか、これまで何も考えずに食べていた一粒一粒が、少し特別なもののように感じた。「なぜだろう。」僕は、自分の生活の中にある「お米」を一つ一つ思い返してみた。部活が終わり疲れて家に帰った時のお米が炊けるいいにおい。あれは僕にとっての「おかえり」と同じだった。食欲があまり無い日でも、お米はたくさん食べられた。また、学校に持つて行くお弁当。少し硬く、つめたいごはんも、なぜだか無くなると物足りなく感じた。このような出来事から、お米はただの主食ではなく、僕の日常の風景であり、家族との温い思い出の中にいつもあったことに気がついた。

お米が値段では計れない、かけがえのない価値を持っていると思った僕は、なぜお米の値段がこんなにも上がっているのか、と深く考えるようになった。ニュースや記事を調べてみると、その背景には、夏の猛暑による不作や、肥料などの価格高騰といった、様々な問題が関係していることが分かった。このことを知って、僕たちが毎日当たり前に食べているお米は、農家の方々が天候や病気と闘いながら、いろんな物価が高くなっているこの世の中で、一生懸命に育てた大切な物だということに気づいた。しかし、その農家の方々の苦労は、お米の価格高騰によって、お米のことについて調べなかつたら、気づくことは無かっただろう。お米の価格高騰は、単に家計に影響を与えるだけでなく、このようにして一般人が農家の方々の苦労、努力に気づくきっかけになったのだ。フードロスや食料自給率といった言葉も、これまで遠い世界の話かと思っていたが、お米の価格高騰を通して、身近な問題として感じられるようになった。

お米の価格が上がったことは、もちろん家計にとっては痛いことだったけど、そのおかげで、僕はお米の一粒一粒に込められている「重み」に気づくことができた。これまで当たり前だと思っていたことが、決して当たり前のことではなかったのだ。だから、これからは、食べ残しをしないように、そして、当たり前にごはんが食べられることに感謝しながら生きていこうと思う。この気持ちは、お米の価格高騰がおさまり、お米の値段が下がったとしても変わらないと思う。むしろ、お米の本当の価値や、食卓のありがたさを再認識させてくれるだろう。

近年、日本でお米が主食として食べられる割合が下がってきてている。しかし、これからの時代、お米は感謝の気持ちや当たり前の大きさを認識させてくれる、大切な存在としてまた、日本中の食卓の主食として、食べられるのかもしれない。

僕は、お米の価格高騰を通して、様々なことに気づくことができた。だからこれからは、僕と「お米」の関係は変わってくるだろう。それは、当たり前の関係ではなく、感謝と敬意を伴うような、新しい関係だ。値段が上がってしまっても、食卓からお米をなくすことはしたくない。それは、ごはんを大切にすることで、僕たちが向き合わないといけない社会の課題と、それに関わるたくさんの人々の思いを、忘れないようにするためだ。

僕はこれからは、炊きたてのごはんを頬張りながら、その一粒一粒に込められた人々の思いと向き合っていきたい。そして、そのごはんがある温かい食卓を、ずっと守っていきたい。それが、僕が「お米」から学んだ、一番大切なことなのだ。